新編水滸畫傳

初編

四

へ21
875
4

へ幻 875 4

無言の濱に遊ぶ感
濱砂布き陰雲の
岸松犬波同
一夢の時幻邦
妙庭致佳人
玉衣閑姿麗
同取得隠逃
鳴吟艶月美
樹下降天孫
畔雲生

仙陽

新編水滸畫傳卷之四

東都　曲亭主人編譯

史大郎夜華院縣尉走

さても史進は華陰の縣尉が二人の都頭なるもの許多の土兵を率ひて莊院の四面をぐるりと圍んでこいのみせんと藏まりぬ。朱武が二人跪くいつわ。太郎は又未乾淨のなるみ吾倘ご爲ゆ連累せられるかもやあるやと我倘を縛ゆ引ゆくしの人。志うるときは負累を免ゆ愛ゆ紀賞を預ゆのみべしといかを史進笑もあへず頭をふりこれはいのなる言語ぞや。汝達ごときの輩。個二人を賺ゆ招きうせ潛ゆ官ゆ訴ゆえく。賞を請ゆこと是奇ゆ已を利せんとて天下の笑を惹ゆの

なり。今いうまでもせんなくぶ[illegible]り。[illegible]きは汝達とりつまみ走し。
活る時は汝達とりつまみ活んと言うまでもなくまたは智の足ざる
ふ似られば[illegible]まづ討あの大將みな見系[illegible]その素歴を[illegible]べと
いひて撰みみ上り[illegible]頭を築牆の上ようまで牛[illegible]あ人の都頭何ゆ
のまへ[illegible]夜半みこの牡肉を切[illegible]ぞ[illegible]味はこの二箇の超頭
答[illegible]いつ[illegible]大郎この期みなくも。あは頼哩[illegible]。猶戸李吉
原告[illegible]とみなりて指[illegible]示まみ史進は李吉を月光みすし
[illegible]大みな怒り。やをれ李吉汝甚胡説なり。今何の證據あり[illegible]。
かる訴みを及びぞ[illegible]いきれあ[illegible]罵はば李吉うぶ[illegible]あぎ
笑ひ[illegible]もこの事をちざ[illegible]の向みは原みは王四が遺せ少華
山の逗簡を拾ひ[illegible]みよ[illegible]ちも置まで訴[illegible]證據なし[illegible]

いへせどと意[illegible]史進忽地疑ひ惑ひ王四を呼[illegible]かるるやや
汝性みは逗簡なり[illegible]。[illegible]つの[illegible]つ[illegible]。
責問みそ王四も今は遁[illegible]。當夜[illegible]酒を飲[illegible]林の内は醉み
逗簡をば奪ひ[illegible]明白みは[illegible]みは[illegible]
みは[illegible]。驚き怕は逗簡は[illegible]。只狂[illegible]
みの罪を恐の人[illegible]賜る折[illegible]討[illegible]の大勢喊声を合せ[illegible]只管と
[illegible]人[illegible]る勢を示[illegible]史進の武勇は怕[illegible]
ば漫みは門内へは攻[illegible]時は史進は外面は對[illegible]。
汝人の都頭は拘[illegible]。[illegible]鬧動を鎮[illegible]
[illegible]人既は[illegible]幾覚[illegible]人は陳[illegible]は言語なし。[illegible]只今[illegible]
の頭領を縛[illegible]進[illegible]べ[illegible]ばは園を退け[illegible]

結ぶへうと高声に叫びり。あくの頭いとれを伏て潛ひ隠ひ。
去ればさるも賊を縛て遍ふりへと。回答まつる間ふ史進ハ樹ふを閃
て飛下り王四を呼て只一刀ふ破殺し。莊客ふ命て莊院の四方ふ
火を放させ。朱武ふ三人と呂もふ鎧一縮して。おの〳〵腰刀朴刀を接
てそれ門を開き走出さう。この時あくの都頭いと人数を遠けて史進
ぶおとづれを待るふ案ふ相違して史進こづゝ煙の裏より切て出
朱武楊春ハ左右ふ従ひ陳達ハ後ふ備ふ嘩囉して莊客ふ引率
して一衝一撞東を指て西を殺し。その勢破竹のごとくあくの都頭
この證人李吉を従て停立る眼前へ驀地ふ撃かゝれば。こ人大ひ
懼怕ませ。ひたすら逆へ戰んとまつるを史進ハ李吉をとりて。ものゝ一声
の霹靂靈頭の上ふ落るごとく。咄と嘘て其刀閃よりうえ

李吉ぶ體両段ふ成て。忽地撞し仆ふ。両人の都頭いとの光景を
見て怕ませ慌怪しく逃んとまつるを陳達楊春遮て。ものゝ遂ふ両人
を切伏ふ。縣尉ハ活る心持もなく。鞭を鳴らし馬を跑て。土兵ども
ふ。こゝ足もなく逃らせぬ。かゝる史進ハ朱武陳達楊春と莊客ふ
嘩囉を従て。少華山の寨内ふ到て喘息まつるふ朱武ふ三人俄
頃ふ牛を殺し馬を宰て賀喜の酒宴を設て。おの〳〵醉を竭し
て。話この下ふなし。さて程ふ史進ハ思もよらぬ家を喪ひ。
少華山ふあるの數日ふ及ひ。ものの中ふ。もし既に莊
院を焼失ひて。家財什物すべて灰燼しぬ。めぶべうべき家も
なし。されば。この郷ふもなごり惜く。後ふんとをおりもぞ。こゝふ師
父王教頭ハ関西の經畧府ふ在て。とゝくこの人をたよりて。彼

九紋龍
莊前ヲ
縣廻ト
戰ム

処みこそ刻くべうれと思案しつ一日朱武ホる森会をうりく別を告しうぶ。朱武ホ二人これをよろこび。ほ身遠方へ別んつひを欲せずとも。今この寨の主となりて世を安らこのみ送りつのへ。又草賦の隊こ法人ろを厭のうぶ我們力を合せて莊院を舊のごく整ひ。なごりく此身ホ徒く。良民となるべしといつホ。史進がいつ毋。おのくの好情を深ホあるねど。既ホ做公人を殺しくれば。故村へ立入る事うるひ難きれども。これ潔白の人として。この寨の主となり。あきハ此毋の名よく活んるいいもかこと。縱おのくいの紅寶ホとても任る身ホあるねば明日袂を分ん。朱武ホ苦ホ信るを聽ず莊客ホをびきくべく少華山ホ留おきて。次の日些の銀子を懷ふ。行裝をうのくく山をりまハ。莊客ホ共顧主徑の別を惜ら朱武ホ小人ホ小嘍囉を將ていく。蘆ちぐく送りゆき。涙をそそぎく留別の情を舒まハ。史進ハこの徳の庇を忘び難ず。遂ホ関の西を投て旅路のうしホ去りきるるぞ。

○魯提轄拳ーーー鎮関西を打

九紋龍史進ハ少華山をうちぬく。関西の渭別を望くホ行ホ。或ハあーー峯の山を越。あるひハ玉鉾の路ホちるひ。夜ハ影に林宿りく在明の月をなごのめ。昼ハ險き谷を渉く。夕つ日の影ホ吟ひ霜ホ朴雨ホ歇こ。元宋月あちうを経く。渭別の地ホもるけるぶ。この裡ホ經畧府ありとんメ是ハ。師父王進ハ其処ホこそ居ホうれく。當日城ホ到る。六街三市を徘徊るホ一軒の茶坊路にホあり。史進ハこの茶坊ホそひつ。端ちのある葉ホ尻

うちつれだち茶博士これを迎へ入れば。密官あり。いのある茶を喫するかぞ〳〵
問史進答へ。これハ泡茶をとそ喫べりれ〳〵人ハ茶博士やどて泡茶
を進ぶ。ちるみぞ。史進ハ茶を喫なるの〳〵問ふ。この裡なる經畧府
へいづちあり〳〵問べ。この前面なる府便ろれあり〳〵ぶ。ちゝ〳〵べその
府の中ハ。東京八十万禁軍教頭王進といふ人あるをきかりや。と
問茶博士ハ。沈吟〳〵。この府裏ハ教頭拝〳〵をのれば。三四人
王氏を名告る教頭もあれ〳〵いづれ王進といふものハ〳〵も辭ゆい
ぞと拝〳〵祈〳〵。兵ハ多ば一人の大漢大踏ハ歩ミ来〳〵。茶坊乃
聳子ハ。ちゝ〳〵ぶ。史進ハ。ぶとの人をみるハその摸樣軍官〳〵お
ぼ〳〵て。面圓く。耳ハ〳〵。鼻直ぶ口ハ方ハて。腮の辺ハ鬚
鬚ちげ〳〵生出身の長ハ八尺あまりありて。腰の闊ハ十圍指わ〳〵すを
十圍とハ。もあるべ。とのくらゝハまり〳〵茶を喫〳〵さ。茶博士史進ハ
對へ。密官ハ王教頭を尋ぬ〳〵なるハ。この提轄ハ問ふ。ぶ
ハ〳〵ちり〳〵在ぬべ〳〵いつハ。史進慌忙〳〵身を起〳〵礼儀を
舒〳〵ぶ。彼人ハ史進ハ相親堂〳〵と〳〵好漢なるをみ〳〵。會釋
ぶ。互ハ席をぬ〳〵ぶ。時ハ史進ハいつ〳〵楽余ハあれ〳〵
官人の高姓大名ハ何と告ぶ。彼人ハ〳〵。これハ〳〵の經畧
府の提轄をつ〳〵むるものぞ〳〵。姓ハ魯。名ハ達〳〵。人
これを稱へ魯提轄〳〵もいふ。彼辺ハ又いづちの人ぞ。その名字ぶ
ぶ〳〵といふ。史進ハ〳〵謙遜ぶ。そ〳〵ハ華州華陰縣の人氏
姓ハ史。名ハ進といふものなり。さて官人ハ問ふ。紀ハ。それ〳〵しハ一の
師父あり。えとれ東京八十万禁軍教頭王進〳〵といふ人。今ハこの

人當所の經畧府ゐあるよ――なるほど索まれて宿ぬへいづちゐや。
教ふと叮嚀ゑ尋れば魯達ゆく。伍辺ハ史家村なる九紋龍史大郎
ゐハあるとあるといへハ史進拜伏――。それぞれ便九紋龍なりといひも
訖らぬゑ魯達連忙く礼儀を還――。常言ゐ名をゆハ面をゑるゐ
志うぎ面をゑるハ名をゆより勝れるぞいゐある伍辺ゑ渡りたゑ
王教頭ハ東京ゑあるる。大尉高俅ゐ憎まる王進ゑるゐあるぞ
やといゐゐ史進點頭る。宣ふ――その王進ゑ言ふ今ハいゐゐ志
つる。志るるぞやく教ふゑ――と請需ゐぞ。魯提轄ゑいつゐるれ
も孫――王進ゑ名ハゆ及ぶ――。この人ハ延安府の鎮守る。老种経
略相公の処ゐあり――。この地ハ滑州ゐ――。小种経畧相公の守た
ま人外なるを伍辺ゆあやまち――。索まるる――おぼ――。志るれで

いゐゐ索ゐるも。王教頭ハ當初ゐハあ――ぎゆるいつゐゐ史進もゐうやく
ゑつき――。呂官後悔志るる魯達ハ史進ゑいと本意なげあるを
るる――。伍辺定――長途の疲もあるぞ。誘ふる人彼処ゐ到く一杯の
酒をも喫ん――ゐを携る――。伴ゐ――。茶坊を立
出る時魯提轄るる――。茶銭ハ明日持参ぎぞ――いつる。
茶博士應る――。提轄うぞ――れ茶を喫ゐるも何う苦――るぎ――回
答志るるゆ――。西人――を去る――去四五十歩も来る――ゐ只るるハ
人ある――園住――いと鬧――れ。史進ハ何事ぞ――ゐひつ。衆人城
開る――これを――るゐ園の中ゐ一箇の人あ――。十束條桿棒
を使ひ十数箇の膏藥を盤ゐ盛る――。これを賣ゐてぞなる
る。史進つる――彼人を――ぶべむ――初――武藝を学ゐ――師父

史進
魯達
伴まとく
路よ
李忠か
達よ
藥要八百八味
此演戯十八般

打虎將李忠といふものなりけるべし。史進呼つぎて声をうけて。その名を連呼し極て李忠もそこゝに史進を看著て大に驚き怒て別の情を述るに魯達はいとゝどかゝいぼえて。李忠に對ひ汝既に史大郎と師弟の因あるべし。今吾倚て共に退て一杯を飲て酒をふ九献しつゝ喫んやといへば李忠應て其れがいとの恙を賣りて後よりぞ来るべき提轄は史進を將て先へ去きたるといひもあへぬに魯達大に焦燥て汝が如きゆけ。いつまで是にまんやといひつゝ園住る人を右に推左に曳て。この愚者どもいふに物ごとに屁眼をとゝ闕ふらしべ。連に立去べいと打べ〳〵と罵るに衆皆魯達が勢の猛に怯て紛〳〵として四方に立去りぬ。李忠をも伴ひつゝ潘家といふ酒樓に登り。三人囲坐して酒酌ふて折しも間壁閣子に人ありとおぼしく頻に啼哭ありけるに魯達憤て去りてあり。碟児盞児を捲て掴て樓の板上に投しかば酒保この聲に驚き慌忙て走り来るに魯提轄声をあらたてゝ怒て酒を喫よいとゝも酒賃を借べしといふもあるに忠をなだめて忌〳〵しきかの啼哭をとゝめて酒肉を醒さんとする畢竟汝等ごとき人を傷ることそこいきまれあるに罵る酒保抄手して官人まづ怒を息めんとそれ〳〵いとゝを宥せく。刃の樂にいとまなきに。うれは日ごとに樓上に来りて活をなすこの婦のなるこの官人にもの〳〵に在まを去ふぞうれ〳〵一時に車に迫て〳〵。いかゞ〳〵ちなきいひ〳〵ものなりん。何なるも僕が面皮に看て許し

ゑと倍結それべ。魯達父子さいくれハ一切曉得ず。泣とやくそのく
を寫まりて。これをつせよと集燥ハ酒保おそるゝ陳彦丹辺きしが。
紙もかく件の両人魯達おゝはしりを歩まりて。前ハすゝしこく
ハ。十七八歳の女子ハかゝ。背後ハ従ふ一人ハ。五六十歳の老児なりゝ。
ゑハ串拍板をゞりてゝる。彼女子ハ十ハの容貌なゝしくゝ。
さこゝくを動さその顔色ありゝ。翠の黒髪ハ一枝の玉簪を挿。
柳の細腰ハ六幅の紅羅裙子を繫。雪さゝぶゝき肌妙ハゝ。
遠山の眉を顰。涙さゝぐゝ珠を落さゞりる形勢ハ。
雨ハ病ハあゝ。ゞゝなゝゞて雲ハ愁るなるべく。定くハ憂を懷
恨を積くおぼゝ。さて彼女子ハ。涙をゝき拭くゝ。深ゝくこくの前ま
立生ゝ箇萬福（万福とハ唐山の婦女子。人ハ對ゝての礼やうゝ。人まてもむゞめそちふ
人ゝくもゝ。ハ万福を嘶ゝ。次ハ鮮漢ハおゝぶゝ。この方の婦人ハ對ゝ）

とゝふハ。彼充兒も拝伏ゝくゝこくハ具えゝゑ魯達官
ゝいふハ。汝両人ハいゞくのくそ。又いゝかる情由ありゝ。いくゝうち
泣るゝそゝいくハ女子答くゝ。こゝふを元東京のそのなるゞこの滑列
の親眷を伝りゝ。親子ふくたるゞゝ来りゝハ。そゝもそのく
い。近曽南京ハ搬移ゝゝ。笑えゝ祖ハ頼む本蔭ハ両漏こちゝ。
ちゞゝ逗留ゝくありゝるもハ。母親ハ客店ハゝ頓ハ身まこゝ。父子
二人いゝ流落。うき月日を送る折ゝ。鎮関西鄭大官人富ゝ
くゝ稱ゝとゝふ賊主ありゝ。いゝの祖ハこの奴家をこゝりゝ媒をゝつて
妾ゝせんゝをいひこゝら。強くゝ二千貫の文書を寫さゝ。
ゞゝの銭をゞ遍ゝさゞ。こゝふをゝ迎ゝとりゝの僅ゝ箇月ハと
及ゞゝハ彼家のゝ娘子嫉妬ふくゝ。忽地ゝくハを追出ゝ

魯提轄酒樓丹金翠蓮
父子を憐
酒泉
行路人心
独幸坊

能添壯士英
雄膽
善解佳人愁
悶腸

生受せ一店主人ハ名落付りく。彼こ千貫文の身價を。遠一銭くも
と妻もるる。日ハいく度といをを志ぶ。文へ手も考く。元来懶惰ハ
ふこのなるこハ。これを弄ひくいひ締んくもせど。彼ハ銭あり勢あり
く。當初掌一文をも与ざりし身價を。文書を證据ニ一ハ官
ハ債付り。こハ於くいのハもせんまべかさハ。小ゆり習おぼえ一小
曲児を唄ひ。この酒樓ハ来りく。日〳〵ハ些の銭を獲く。過半を
彼ハ遣一。そのうち僅だうを殘〳〵。親ふご盤纏〳〵付りしハ。
この夜三日ハ〳〵〳〵酒客も稀ハ来ハ。彼銭の限りハたゞひいく討
らハ〳〵。いのある恥やえつふん。とそうひなき公ハ。偽ちくもえ
悲〳〵く泣声ハへり〳〵せ一を。官人くもちハ怪られ。面目もあく付りくひ
つ。挾き袂を顔ハ掩ひ。〳〵〳〵涙雨のゞ〳〵なるこハ。魯達又問く云

ゆう汝ハ姓ハ何〳〵うとゞ。今ゞれの客店ハのある。又彼鄭大官人ゝ中ん
ひゞちふ住ひする人ものぞと。ハ老児答く。それゞの姓ハ金氏ハく排
行ハ二郎ら。又女児ゞハ字ハ翠蓮〳〵呼てい。金氏の女児を翠蓮と名つけ
婦人の行を金蓮歩と云ハなり。潘妃が金蓮歩の故事ハ後世
く。毎日ハとゝうゝひいなり。又彼鎮関西鄭大官人ゝ妓
元橋ゝいゝ橋の下ハく。獣肉を賣〳〵活業ゝする。鄭屠ゝいゝ
りのあるゞ。綽号を鎮関西ゝ稱い。親子首尾おちもあく。ゞ
且ハ魯提轄ハ了く。いゝ腹〳〵〳〵き氣ハ人ハく。鄭大官人ゝ
いゝ妓を。行人〳〵おりひ一ハ。原来この經畧府の前ハあく。猪
を屠り〳〵世を〳〵る。掩贖〳〵き発ハなり〳〵く。只管ハ怒罵王
史進李忠を又〳〵てハ身二人ハ志ゞ一〳〵ハく待ゞ。れ今

面きゝ。鄭屠を打殺し来りて。いひも果さぬ。既に走り出んとするを史進李忠危なかり抱き住めさまゝ。いひこしらへ寛ふるゝぞ魯達やゝ元の坐に復るといへども怒ふほ島まぬ。金老父子に對ていふ。汝未安堵なる理會をこゝに。汝等ふ盤纏を与へて明日東京へ旅ぐきまべしといへば父子のうの喜を合せり。斯のごとき庇を蒙るときハ宮廷ふ寫ふ重恩忘れ父母ふ捨ては。ものいハぬ。我們ふ立退きハ鄭大官人かあゝぞ店主人を討て彼銭を返せといへべてを以店主人も放遣ることを肯いなきまゝ。といへば魯達声を励し。これおのゝ道理あれば聊も妨ふるといひつゝ懐を探りて。五両の銭ふをとり出し。卓の上に叛下。さて史進に對ていふ。これ今日ハ少ちあり世る銭と為ふ

ふるゝ。ハ銭あらば些を借ふ人明日いとふまで還し進ずせん。といへば史進ハ安きゝもと回答ていふ。包裹より一錠十両の銭ふを取り出し。卓の上に放在ぬ。魯達ハ李忠に對ひ。汝も些を借せといふ。李忠ハ。ぶ〳〵二両の銭ふをとり出せば。魯達ハ街に高〳〵銭の少きをうちもらぶ。これをバ李忠に投入し。只さの十五両の銭ふを金老ふへといふ。汝父ふこれを盤纏とし遠く行李を收拾ふ。これ明日朝まぶきふ發ず。故郷ふへまべし。これゆのバうふ〳〵ぞ店主人も阻べうまぶ。慌ふ出せば。金老ハ女児とともふ魯達を神佛のごとく伏拜ていふ。おのゝ宿處へ立ていれば。魯達史進李忠ふも引つゝき酒肆をもち出街の上ふ〳〵相ま れ。史進李忠ハ。おのれ〳〵の旅宿を投て退りるまり程ふ金老

父子ハ、ろひもうけぎ十五両の銀子を得て、ふ〳〵款び、一附み行装を整へ、房宿錢ハ、遺ハ〳〵算清し。次の日早天ハ起出て飯を喫べ、りんさ〳〵魯提轄ハ、おもづれをさんハ魯達ハ當日經畧府の前なる宿所ハ入り〳〵のとう〳〵憤ハ迫て、晩飯さへ喫さて、夜乃あくるをまちて、金老ハ旅宿ハ到、店小二を呼出し、金老父子を招きれバ、金老ハ翠蓮とともハ忙し〳〵走り出て、その恩惠ハ減うゝぎるを款び、ゆえ、擔児を挑て、走り去ゝんとするを小二ハ、うちゆきて、金公いづちへ去のゆへといひもあへぬ父子を志のと擁住まバ魯達傍より前へ立り。この両人汝ハ家ハ房錢なゝの虧ありや。なゝ、てうり〳〵住まぞといへハ小二ハ、〳〵。房錢ハ、疇昔遺ハ〳〵算還し〳〵れと、彼鄭大官人の錢をいまゝ還し果さはう。

遠く放遣しきハ後難脱ぬ〳〵〳〵と云へハ魯達忽地眼を瞋し、鄭屠ハ錢ハ、ゝの方より還まゝ。汝それハ、ゝ父子を住ゝやといひ嚇ハ小二おそる〳〵再び口を開んとまゝ時魯達拳を揚てその面上を打し〳〵ハ板歯二枚を打折り。小二ハ、ゝ驚記怕ぬ顧を抱へつゝ、ゝ躁ゝ。主人ハかく〳〵告ハられバ、主人ゝも驚ゝ立出て金老翠蓮ハ、脱ハ街のゝへ走り去ぬ。魯提轄ハ、ゝれ今ゝを退ハ。集奴ハ定ゝ金老を追蒐べ。ゝれ權ゝハ家内の者ゝを遮ゝめ、ゝ思案し。店上の衆子ハ尻ゝ出て行もゝゝ戍屠ぬ。店主人ゝの猛威ハ怕ぬ。一言半句の問答ハも及ぎゝを空し〳〵なゝのめ居ゝる魯達ハかく圖ゝ後時剣を考へ今ハ追ゝも急ハ及ゝ〳〵て。遂ハ、ゝを立出て狀元橋

浴室

父子客店
東門暮家
魯達店小二を咀て金老翠蓮を奇らす

を引き走ゆきり。この朝鄭屠ハ両間の門面を押ひき。両副の肉案を布べ。猪肉許多を掛てゝ。小厠ゟ高賣の指揮なゞ〳〵あり。魯達大踏ゟ歩〳〵て入まんば。鄭屠ハ〳〵出迎ひ提轄官のゆひ〳〵。ゆづうゟ。指揮ゟふりの手と人ハ魯達ハ声をあり〳〵。鄭屠〳〵。これ経略相公の鈞旨を奉て〳〵来まり。たゞやく猪肉十斤を。臊子ゟ切〳〵進らせよ。半點の肥的を。そのまゝゟ〳〵あり〳〵ハ。ハ用ゟハ〳〵ぬぐ〳〵呼ぶ。鄭屠ハ〳〵命義あぬ〳〵回答し。魯達を聳子ゟ中〳〵ふせ使頭をいく〳〵肉を切せんと。ゟ〳〵ハ魯達又いふ。彼ホハ腌臜厠なゞゟ。ゟち任せ切〳〵ゟやある。汝ゟ〳〵切べしと焦燥ゟぞ。鄭屠ハいと怪ゟ〳〵き。ゟこのふと。ゟひゟ〳〵。說得ゟなり。それゞ〳〵切〳〵進らせんとて。肉案の上ゟつと居る。ゟ〳〵十斤の肉をいと細ゟゟ切む折しも店小二を。ゟ帕をゟ〳〵頭を包ゟ。鄭屠ゟ金老ゞの賣を告んとて来り〳〵ゟ。魯達ゞ肉案門のわとりゟあり。ゟ〳〵怕ゟあゝ〳〵攏袖ゟ。簷下ゟ傳立つ。遠〳〵ゟち望ゟ〳〵ゟ居ゟ。ゟ〳〵ゟ鄭屠ゟ肉を整〳〵ふ切ゟ。これを荷葉ゟ包ゟ〳〵ゟ。提轄これより人を。〳〵送ゟ〳〵せやべきゟ。持ゟ〳〵去ゟ〳〵〳〵人ハ魯達又いふゟ。これ又別ゟ至あり。十斤の肥的を。これ又臊子ゟ切〳〵進らせよ。半點も精肉をゟ〳〵べゟ〳〵ふ。御用ゟハ立〳〵〳〵といふ。鄭屠ゟ〳〵。精肉ハ裏〳〵。饒鈍ゟもなれゞ。肥的を臊子ゟ切せ〳〵。伊ゟ去ゟふべきゟ〳〵人ゞ。魯提轄眼を睜ゟ。ゟれか〳〵もゟ。相公の鈞旨ゟ〳〵分付ゟ〳〵ゟ。ゟれハ我もゟの故を去ゟ。汝切ばゟゟ〳〵切めと焦燥ゟ。鄭屠ハせひゟ〳〵ゟ

十斤の肥的を切り〻これをも荷葉に包みおどせるに従足隙どり
く。一時あまりを経てといへども店小二は魯達が帰らざるにふりくらほ
裡に入るを得ず。魯達は金老親子がいまだ遠く走りつるを
見ひすまして。両色の肉を採り。又鄭屠がうち数ひ。これを別に置
あり。十斤のす金軟骨を臊子に切て進ずせんとこれ鄭屠はかの次
く呆れ果。提轄何〻かくるを消遣するぞと歩笑へば魯達つ
〻身を起して。これ汝を消遣といふも。何の苦かべきくいひもあへず。
両色の肉を把て。鄭屠が面へ打つくれば。二十斤の臊子もちりく散乱
て肉を雨に異ならず。鄭屠も今は恐れ怒り砧底下より直に衝
て項門心の頭登り骨を刎出刀を引提て一道烟走に跳出て来る。
魯提轄接足に外面に立出れば。近隣の人家過路の老弱男女。鬨住
くこれを見るに〻も魯達が猛威に懼怕す。勸解人とするものも
あり。彼店二もこの光景に驚き呆れ人の背後へ躲り。時に鄭
屠は右の手に刀を好げ。左の手を按住て魯達を撚んとするところを魯
達は勢に就て。彼が左の手を按住て胸を一歩撲地と
踏住て。品山の下に死を揭鄭屠を看者いつのまにか当初老
种経略相公に投じ。関西五路の廉訪使なり。鎮関西と
嗔事をあざむ。汝はこれ肉を宰刀を操る屠戸に。狗のひし
き愚者なるぞ。いうなまべこづの鎮関西に補るぞ。志のごとくなる
す。翌蓮又子を強騙て。千貫の借銭を肩代せる天罰今さら
思ひ知るべしといきまき。鼻子上を丁度打バ鮮血さつと流出て鼻
子は半辺へ歪つ。恰一杯の油醤店醎的酸的辣的一度に袞

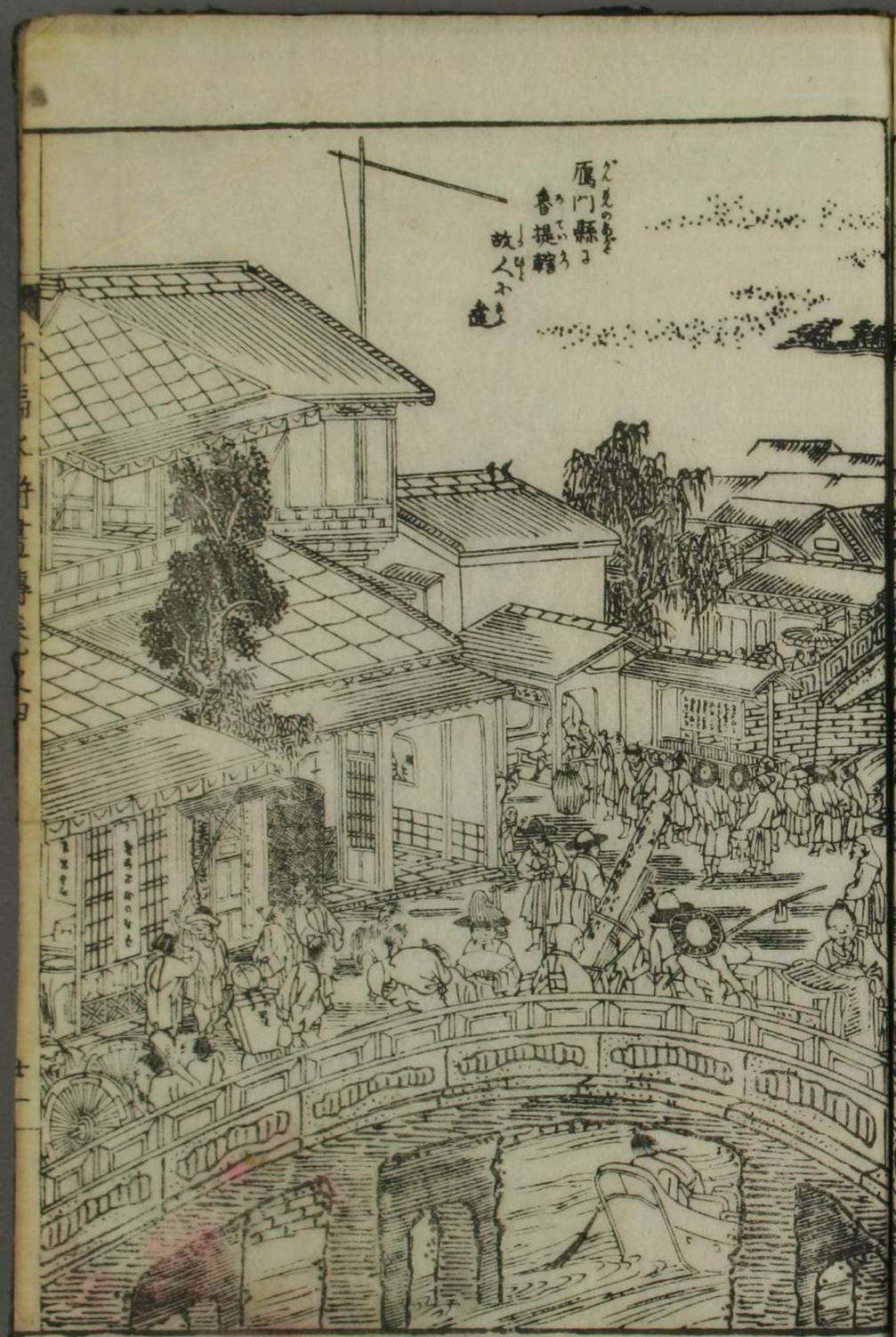
怒み蹴て
魯提轄
鄭屠を
手裏殺
日休刀

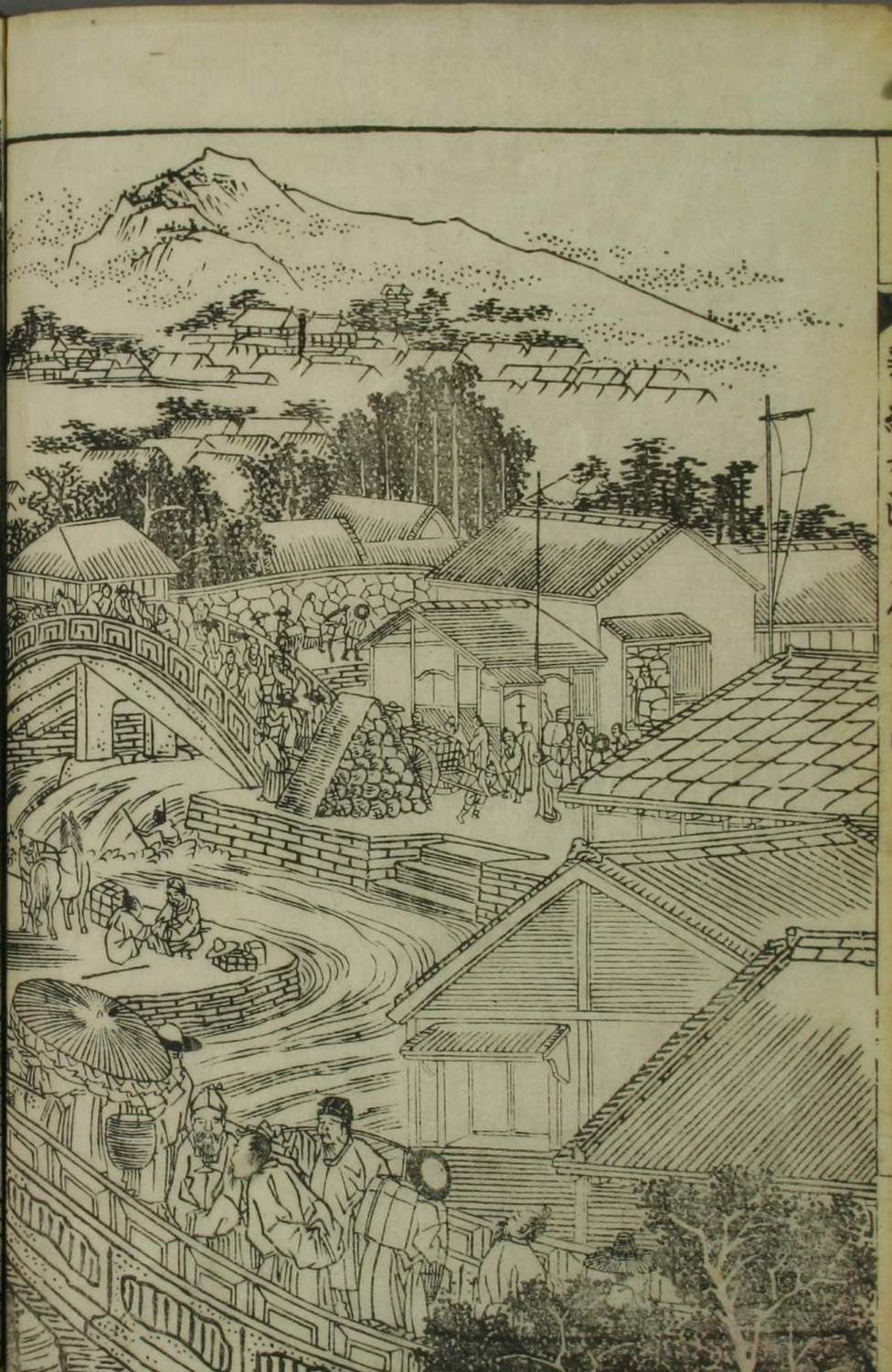
かゝれば。鄭屠は大に苦〳〵しがる刀を捨しゝぶ魯達又拳をあげて
く。眼眶を丁と打。烏珠高く迸出し。一軒の綵帛錦紅的黒的
青的。ちらゝ〳〵と彷彿〳〵。面辺にあつまりて魯達の勇
力に膽を消し。只逡巡〳〵前に得ずこの時鄭屠は虎の鳴ごとく
高聲にて叫べども魯達罵〳〵おはゞ息ぎ又
一拳太陽の上を打。一字の金堂水陸道場をたゞし鈸兒鐃兒
の響に育く。鄭屠は忽地挺在〳〵。唇の欠も震り〳〵徑
に魚目達杉木のごとくなれば口いと〳〵打〳〵懲さんと思ひ僅
に拳を〳〵もたゞ〳〵彼いか〳〵綽斷おべくもとれを要
穩に〳〵〳〵思案し。遂に接足に去らんとせしこの屠を見て
〳〵汝能たゞ〳〵誰かこれを實〳〵さべきこれを

まゝ〳〵慢〳〵理會人目今の遺恨し且罵り且歩こやゝて宿所
に走入りて。衣服を被て盤纏を懐に。眉に育き一條の短棒を提
て。南門より走り出て舊地に脱去ぬさて又鄭屠が眷属近隣乃
衆人は鄭屠を助起〳〵さまゞ勦るに生日あまりを経て是
に遂に沒ぬ。哭に黄泉の客となりぬ。衆皆相語〳〵外衙に
松生便告狀を進ずべ府尹廳に立出て。狀子を看るに左右を
見て〳〵〳〵魯達は経畧府の捉轄なるべ。こゝに公の子〳〵あり
捕捉〳〵〳〵。俄頃に轎に上り〳〵経畧府に走き。門前に〳〵轎
より下立べ。把門軍士か〳〵出て廳上に迎
て對面する府尹に儀を厚し〳〵〳〵相公の府中なる提
轄魯達。今故ありて〳〵市人鄭屠を打殺し。〳〵〳〵このゆ

を相公に告え進らせよ。とかくもむかへんぞや。と云ひて気を尽すなれど
告るにぞ経略もこれ驚き。おりから魯達は武芸に勝れたれど
鎮関にしかく人命を傷ふ人は。たとへこれを救ひがたし。すべく
若くは其のなき言ひつ便座にしかり。魯達は元この父の処に
ありし。経略府の軍官なり。近曽まで手に属して半点の過をも
なかりしが今日人を殺せし人は。必ず法の如く行ひたまへ。勿論し。
父は遠処に鎮守されば。このうち後にこそかつて聞かせ回答せよ
ば府尹へこれを得て。州衙に入て。當日緝捕使臣を呼びつけて。
文書を押下し。犯人魯達を捉ふべき旨を命ずれば。王観察
いふりの奉りて出て。あまりの做公人と共に魯達が宿處に走
むかひしに。魯達は今朝逃亡して。ゆくへ定めず。なをしもあれば王

観察ぞのがし部下を索しても。時も遥に隔たれば。急に捉ふべうも
あらず。衆皆せひなく立かへりて。如此しの由を演説するに府尹
やむことなく文書を各処へ押下し。彼魯達を捉まへたらば賞銭
一千貫文をあたふべき旨を命じ給ふ。鄭屠が一属坊正里正房主
人をよび出して。件の情由をいひわたしければ。鄭屠が家の棺木
を備へて。その屍を葬りて諸この下にかくしてさても魯達は當日
渭州の地を離れて。東に逃れ西に走り。群を失ふ孤鴈網を漏
し活魚更に明なる月に翔り還りて流れて水に浙るに異ならず
その遠近を分ねばましく高低をも顧ず。ものいそがしく路行人
に撞倒脚は快しく陣に臨む馬のごとく。いそがしの州府をも見り
て身を逃れて路を避けず到ところを一日の家とせり。いふしへより


鴈門縣ヨ
書提轄
故人ヲ
遣



餓りのハ食を擇ず。寒さのハ衣を擇ず。惶りのハ路を擇ず。貪きものハ妻を擇ずといひ。常言も。今こゝ人ゆゑ。既ゆくゆく半月あまりを經て。代州雁門縣ゆ到て。彼方此方を徘徊し。いと鬧熱しき市井を過るに。一簇の人。十字街口ゆ圍任て。制札を讀居り。その光景いかゝなるやと。肩を扶頭を支へ。紛々として賢愚を辨ぜず。又貴賤をとうちゞこし。張三ハ蟲眼ゆして字を識らず。李四ハ鑑經ゆして人のこをうる。白頭の老叟ハ杖ゆ撞ろ。續緑鬢の書生ハ毫を出して寫す。魯達ハ大ゆ目をもりて。いまゞ覗ふまで。ちゞ前こゝろ。榜をよるゆえ来姦筆なりしかれども。その緑故を去ずして。人の續を知ハ滑列經畧府の提轄魯達といふものハ市人鄭屠を打殺せる犯人

金聖歎がいふて王進ゆ史家村ゆ出ゆ加ゆ入ゆ忠義ゆ民の商人ゆ入ゆ今ゆ又金老魯達をいふて後大哥ゆ入ゆ是作者の熟思ゆ人ゆを用ゆる法ゆ

とて。人あり。停藏ものへ。その罪犯人とおぼゆべし。人あり。捌獲ふものハ賞錢千貫文を給べし。と湊もち。ゆゑ。忽地魯達ゆ背後ゆ。張太哥人の名ぬゆ魯達をよびゆるゆなどて。ゆハ在まや。呼びけるの肩を拍くものあり。畢竟この人ハ誰いかなる人ぞ。その次の卷を讀得べし。

新編水滸畫傳卷之四畢